

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 23 日現在

機関番号：34304

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24820063

研究課題名(和文) アンドレ・ブルトンの美術論とアルバレス・ブラボの写真の相互影響について

研究課題名(英文) The reciprocal influence between Writings of Andre Breton and Photographs of Alvarez Bravo

研究代表者

長谷川 晶子 (HASEGAWA, Akiko)

京都産業大学・外国語学部・助教

研究者番号：20633291

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、シュルレアリスムを代表するフランスの作家アンドレ・ブルトンとシュルレアリスムの影響を受けたメキシコの写真家マヌエル・アルバレス・ブラボの1938年から40年の活動を取りあげ、ふたりの交流が両者の創作活動に及ぼした審美的影響を確定することを目的とする。アルバレス・ブラボとブルトン、両者の1930年代のメキシコに関するテキストと写真を検証することで、メキシコ滞在後からブルトンの芸術論の変容した原因がブラボの写真の審美的影響にあるという仮説を証明することに努めた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify the reciprocal influence between French critic Andre Breton and Mexican photographer Manuel Alvarez Bravo. They met at Mexico City and work together from 1938 to 1940. We try to demonstrate that Breton wrote his texts on Mexico, taking as a model Alvarez Bravo's photographs of Mexico.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：シュルレアリスム アンドレ・ブルトン マヌエル・アルバレス・ブラボ メキシコ 美術批評 フランス文学

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は、これまでシュルレアリスム美学の問題を研究してきた。非ヨーロッパ世界芸術をシュルレアリスムが受容するに際して、鍵となったプリミティヴィスムの概念に着目することで、シュルレアリスム運動を主導したアンドレ・ブルトンの美学形成及び運動体形成の力学を明らかにしようとした。

シュルレアリスムと非ヨーロッパ世界の関係に関する研究は、とくに人類学者ジェームズ・クリフォード『文化の窮状 20世紀の民族誌、文学、芸術』(1988年)をきっかけとして、学界でも研究が盛んなテーマである。第二次世界大戦前後の時期におけるシュルレアリスムとメキシコ芸術の關係に着目し、双方がともに及ぼした影響を解明しようとする本研究は、研究代表者のこれまでの研究の延長線上に位置しているだけでなく、こうした学界の潮流に沿ったものである。

(2) シュルレアリスムが第二次世界大戦前後にメキシコ芸術から受けた影響は、アメリカ先住民民族やオセアニア芸術など他の非ヨーロッパ世界の芸術に比べても非常に大きいばかりか、その領域は広範囲に及ぶと推測されている。それにもかかわらず、むしろ、文学や絵画、写真など、複数のジャンルにまたがるという対象の広さがもたらす困難さゆえに、この方面の研究の進捗はこれまで芳しいとはいえない状況にある。

数少ない先行研究のなかでも、グラン・カナリア島の展覧会カタログ『新世界と旧世界のあいだのシュルレアリスム』(1989年)とシュルレアリスム研究センターの雑誌『メリュージュ』のメキシコ特集号(19号、1999年)がこの問題に部分的な光を当てたが、これらの研究には文献学的調査が不足しているのみならず、作品の分析方法にも不備がある。そこで研究申請者は、これまでのプリミティヴィスム研究を通して習得した実証的スタイルを適用し、さらに、研究対象をアンドレ・ブルトンと写真家アルバレス・ブラボに限定することによって、限られた期間内に具体的な成果を挙げることを目指して、本研究を構想するにいたった。

2. 研究の目的

本研究は、これまでの先行研究で扱われてこなかったメキシコのモダニズム運動の巨匠アルバレス・ブラボとアンドレ・ブルトンの關係に焦点を当てている。シュルレアリスムとメキシコの關係は大きなテーマだが、本研究では、自らシュルレアリスムの影響を認めたアルバレス・ブラボとブルトンの關係に対象を限定することによって、芸術論と写真という異なるジャンル間の關係を対象としながらも、一定の成果を挙げることを期待できた。

アルバレス・ブラボとブルトンは、写真家と美術批評家という違いはありながらも、同

時期にメキシコの地理的・文化的「他者性」をモチーフとして、それぞれのやり方で両者のメキシコを表現した。ブルトンの美術論には、メキシコ滞在前後で明らかな変化がみとめられる。この変化の理由のひとつがアルバレス・ブラボとの交流に求められるのではないかという仮説が立てられる。この仮説を、資料収集と読解からなる文献学的方法で証明することにより、文化的交流によって変容を遂げたシュルレアリスムの審美的多様性とその広がり的一端を描き出すことが本研究の目的である。

3. 研究の方法

ブルトンとアルバレス・ブラボの30年代の作品を研究対象とし、綿密なテキスト分析及び写真分析と文献学的調査を行いながら、二人の交流が創作に及ぼした審美的影響を画定していくために、本研究は、(1)ブルトンのメキシコ論の分析と資料収集、(2)アルバレス・ブラボのメキシコの写真の分析と資料収集、(3)ブルトンとアルバレス・ブラボの交流に関する調査、以上の三部から構成される。

初年度(平成24年度)は、(1)ブルトンのメキシコ論の分析と資料収集を手掛けた。ブルトンは1938年、メキシコにフランスの文化使節として派遣され、サン・アンヘルにあるディエゴ・リベラ家に約四ヶ月間滞在了。そしてメキシコに関する五編のテキストを執筆し、ふたつの展覧会の企画に関わった。これらのテキストの分析を、とりわけ事物の描写方法の観点から行った。

平行して、次年度に行う実地調査の準備を整えるために、アルバレス・ブラボの生涯と写真作品に関する資料、マヌエル・アルバレス・ブラボの暮らしたオアハカの文化や歴史に関する資料、ブルトンの訪れた場所に関する資料、ブルトンがメキシコで目にしたと考えられる作品やメキシコ展に展示された作品の包括的なリストを作成した。

最終年度である平成25年度は、(2)アルバレス・ブラボのメキシコの写真の分析と資料収集、(3)ブルトンとアルバレス・ブラボの交流に関する調査を行った。

メキシコに二週間滞在了し、シウダ・デ・メヒコやオアハカをはじめブルトンが滞在了した都市や資料館を訪れて、前年度に作成したリストに基づいて、現地での資料収集を行った。また、パリのメキシコ展に関する資料収集をフランス国立図書館(パリ)において行った。

さらに、ブルトンとアルバレス・ブラボの關係をより大きな視点から俯瞰するために、講演会「シュルレアリスムとメキシコ」を開催した。

前年度の成果、メキシコ、パリにおける実地調査の結果、さらに講演会で得られた知見に基づいて、本研究の成果を「メキシコのふたつの表象 アンドレ・ブルトンのメキシコ

論とマヌエル・アルバレス・ブラボの写真」と題した論文にまとめた。これは、研究代表者が現在所属している研究機関の紀要『京都産業大学論集』に発表された（なお、本論文の中では、アルバレス・ブラボではなく、よりスペイン語の表記に近いブラーボと表記した）。

4. 研究成果

(1) プルトンのメキシコ論におけるアルバレス・ブラボの写真の影響

プルトンのテキスト「マヌエル・アルバレス・ブラボ」(1938年)と「メキシコの思い出」(1939年)を手掛かりとして、そこで言及されているアルバレス・ブラボの写真を詳細に分析しながら、プルトンがメキシコという土地の特異性をどのように捉えようとしたかを解明した。

プルトンは、メキシコ滞在をきっかけとして、西洋中心主義の立場で非西洋の文化を解釈する安易なエグゾティスムに対して批判的な態度を表明するようになった。プルトンは『殺されたストライキ中の労働者』(1934年)や『舞踏家たちの娘』(1933年)をはじめとするアルバレス・ブラボの写真を、ほかの写真家が撮るようなステレオタイプ化されたメキシコではなく、「土地の魂」、「メキシコの悲哀」を表現していると評価している。

プルトンが評価したアルバレス・ブラボの写真を分析すると、普段の生活の中で実際に眼に映るものを切り取りながらも、暗示的な作品を作り出すことで、メキシコの一部でありながら普遍性を備えた風景を撮ろうと試みていたことが分かる。この態度をプルトンは高く評価しており、たとえば生と死の循環というメキシコ固有の原理を彼の写真の中に見出している。

フランス人である自分もまたエグゾティスムの眼差しから逃れ難いことを承知していたプルトンは、メキシコ滞在の経験を文章のかたちで記す上で、自分の解釈を一旦括弧に入れたうえで、事物の描写に固執する。ちょうどアルバレス・ブラボの写真の中に光と影の対立から生と死の循環の原理を見出したように、個別の事物の具体的描写を通して、メキシコの土地に潜む普遍的性質を垣間見ようとする。通常は比喻を用いて事物を描写する方法を採用するプルトンだが、たとえば「メキシコの思い出」と題されたテキストでは、眼に映じた事物を淡々と描写していく。そうすることによって、具体的な事物の背後に横たわる美や生、死といった普遍的な原理を垣間見させようとしている。

いわば、プルトンは旅行記、美術批評といったテキストのなかで、アルバレス・ブラボのまなざしを借りようとしたといえる。こうした見えるものを通して見えないものを表現するプルトンの姿勢は、アルバレス・ブラボの寓意的な写真と重なりあい、芸術批評が写真をモデルとして執筆されたことを強く

示唆している。

(2) シュルレアリスムとメキシコの関係

プルトンとアルバレス・ブラボの関係をより大きな歴史的な視野からとらえなおすために、シュルレアリスム研究の第一人者である巖谷國士名誉教授に講演を依頼し、講演会「シュルレアリスムとメキシコ」を開催した(2013年11月8日、京都産業大学にて)。同氏の講演において、ルイス・ブニエル、バンジャマン・ペレをはじめとする多くのシュルレアリストの活動のみならず、メキシコの画家ポサダ、壁画運動のディエゴ・リベラやシケイロス、女流画家のフリーダ・カーロやマリア・イスキエルドなどの活動の紹介と比較分析が行われた。そうすることでシュルレアリスムとメキシコの活発な芸術交流が明らかになった。芸術的側面だけでなく、メキシコの文化政策や亡命者を進んで受け入れてきたメキシコの歴史的経緯について見識を深め、さらには、メキシコ社会とシュルレアリスム思想の柔軟性の類似も指摘された。この講演会には65名が参加し、活発な意見交換が行われた。

この講演会によって、革命直後から1930年代のメキシコの世界や文化に関する知見とシュルレアリスムの審美的多様性に関する認識がより一層深められることになった。その成果は、研究代表者の論文を執筆する際、とりわけ問題設定において生かされている。

本研究の成果を受けて、より包括的なシュルレアリストとメキシコの関係についての研究を今後進めることが可能になったことを強調しておきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

長谷川晶子「メキシコのふたつの表象 アン
ドレ・プルトンのメキシコ論とマヌエル・アル
バレス・ブラボの写真」、『京都産業大学
論集』人文科学系列、査読有、第47号、2014
年、365 - 381頁。

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

長谷川 晶子 (HASEGAWA, Akiko)

京都産業大学・外国語学部・助教

研究者番号：20633291